

八重山地方における 人とカタツムリ (*Fruticicola sieboldiana*) とのかかわり

野 中 健 一

-
- | | |
|-----------------|------------------------|
| はじめに | 3. 害虫としてのシダミと食物としてのシダミ |
| 1. シダミの採取と食用 | 4. 島におけるシダミ食慣行の位置づけ |
| 2. シダミ採取と農耕との関連 | |
-

論文要旨

本稿では、八重山諸島におけるカタツムリの採取と食用からなる慣行がどのように人と結び付き、島の生態にどのように位置づけられるかを明らかにし、慣行を成立させる背景をみることによって小動物との関わり方を成り立たせる諸要因を、現地調査の結果をもとに考察した。

この地では1965年頃までオキナワウスカワマイマイ (*Fruticicola sieboldiana*) が採取され食用にされた。これは、畑地で採取され、日常的に得ようと思えば容易に入手し得るごく当り前の資源であり、陸の貝として海の貝と同種の日常的な食素材の一つとして認識されていた。また、この採取活動は畑作農耕とカタツムリの活動場所・期間が一致することによって成立していた。したがって、これは農耕に付随して成り立つ自然資源の利用であり、海の貝類の利用との関係で成り立った島しょ部の独自の体系であったといえる。

この食慣行の分布は八重山諸島一帯から沖縄本島にかけて広がっており、奄美諸島以北の日本本土では、食生活の一部を担うようなカタツムリ食慣行はない。したがって八重山地方においてカタツムリ食慣行が独特の慣行として位置づけられることが明らかとなった。

カタツムリ食慣行は、島の生態に適應した環境利用の形態としてとらえられるとともに、その特徴は南方文化の一つとしても位置づけられる可能性が得られた。